

# 南部北上山地における毘沙門堂と谷権現の時空間的位置

—— 宮沢賢治のまなざしが捉えたもの ——

米地 文夫\*・一ノ倉 俊一\*\*・神田 雅章\*\*\*

**要 旨** 筆者等は「北上平野にとって、南部北上山地西縁は東方の異界との境界として生き続けてきたという時空間認識」を賢治が持っていた、という仮説を立て検証を行なった。賢治が北上平野に対する南部北上山地を、中国の平野に対するチベット高原（賢治のトランスヒマラヤ高原）に見立てたその背景には、この地域がかつて大和朝廷勢力軍事首長下の西の平野、奥六郡に、東のエミシの地、閉伊が対峙した時代があり、アテルイや安倍貞任などの伝説や、様々な郷土芸能、祭礼などにその歴史が変容し伝承されてきたことがある。たとえば、南部北上山地西縁部に位置する兜跋毘沙門天像を祀る寺社の配列は東方に対する結界であり、その西方は谷権現（丹内社）信仰などを持つ異界となる。しかし西側が設けたこの結界はむしろ、後々東側の西に対する結界となった。賢治もその結界は中立的な境界線というより、むしろ異界の始まりであると感じていた。

**キーワード** 宮沢賢治、毘沙門堂、谷権現、トランスヒマラヤ高原、結界

## はじめに

早池峰山以南の南部北上山地の起源は南方の古大陸の断片が移動してきて日本列島に衝突して合体した、と考えられている。一方、北部北上山地は日本列島の載る大陸性のプレートの下に、海洋底プレートが沈み込む際に列島に付着させた、いわゆる付加体である。

地形もまた異なっており、北部北上山地が深い谷を刻み、山地としての性格が濃いのに対し、南部北上山地は、高度は低く、谷も広く遠野などの盆地もあり、むしろ高原と呼ぶ方が妥当である。人文的にも、集落や耕地が多く、北部とは異なっている。

南部北上山地地域は、内陸の北上川に沿う平野部とは古くから交流があったが、その地域性、特に民俗などはかなり異なる、と現地では両者が互いに意識してきた。

なお、学校教育の間では、この北上山地につい

ては北上高地、平野については北上盆地と呼ぶように文部省が指示しているが、これらの呼び方は国際的視野からみれば不適當である（米地、1991、1993）ので、本稿では、それぞれ北上山地、北上平野と呼ぶ。

たとえば、筆者の一人、米地は岩手県南の一関で育ち、同地の高校の生徒だったが、東山と呼んだ北上南部山地から来る生徒は「山汽車組」と呼ばれ、純朴で親しみ深い人たちとして、他の生徒たちから愛されていた。また、この地域の家に招かれると、景色や料理、談話などに普段の北上平野での生活では味わえないものを感じ、小さな、しかし特別な旅をした気になったものである。

筆者の一人一ノ倉もまた、この南部北上山地の小学校や博物館に勤務し、その民俗や地名などに多くのユニークなものがあることを知った。

しばしば、『遠野物語』と関連して、遠野盆地は日本の原像とか原郷などと評されることが多い

\* ハーナムキヤ景観研究所 〒025-0063 岩手県花巻市小舟渡 237-3 イギリス海岸ギャラリー内

\*\* 前早池峰山岳博物館館長（2013年9月28日病没）

\*\*\* 奈良県教育委員会文化財保存課 〒630-8501 奈良県奈良市登大路町3 奈良県庁内

が、これは妥当ではなく、筆者らは日本・ヤマトに対峙した日高見・エミシの世界を伝える土地の一つが遠野である、と考える。

宮沢賢治もまた、同様の感慨を抱いていたことは、彼の作品から明らかに読み取れる。

宮沢賢治の作品に関する先行研究は、すでに膨大な数に達し、それらの中には個々の作品の本質に迫るものも多い。しかしながら、賢治は彼の心象世界であるイーハトヴ（岩手県花巻を中心とした東北地域）を舞台として、多くのユニークな詩や童話を書いており、彼の心の内の地域像を把握しなければ、作品の理解が不十分であると筆者等は考えた。

そのなかでも、南部北上山地を舞台とした賢治作品は、彼のきわめてユニークな地域像を踏まえて描かれており、筆者等はそれを主として詩を手がかりに明らかにしよう、と試みた。

すなわち「北上川沿いの平野部の人々にとって、古来、南部北上山地の西縁は東方の異界との境界であったし、それが伝承や生活のなかに生き続けてきた」という時空間認識を賢治が持ち、それに基づいた地域像をもとに作品を産みだした、という仮説を立てた。

特に境界を示すものとしての毘沙門天像とそのお堂、エミシ側の信仰を伝える谷権現（丹内社）、の両者を取り上げた賢治作品の分析を中心に、その仮説を検証する。

（米地文夫・一ノ倉俊一・神田雅章）

## 1. 毘沙門天はなぜ北上山地に多いか

### (1) 毘沙門天の由来と日本における受容

毘沙門天は数多い仏教の諸尊の中でも我々に馴染み深い一尊であり、戦勝神や福德神、あるいは四天王の中の北方天として広く信仰を集める。インドで北方の守護天が特に重要視されたのは、地勢上、北からの外敵の侵攻に備える必要があったからとされる。

起源は古く多くの経典に登場する毘沙門天だが、我が国での本格的な信仰は、平安時代初期、最澄・空海ら入唐僧の帰朝をまたねばならない。

毘沙門天は手に宝塔を捧げ岩座や邪鬼の上に立つ姿が一般的だが、彼らがもたらした経軌・図像の中には地天女の上に立つ兜跋毘沙門天と呼ばれる異形像が含まれていた。

兜跋毘沙門天の起源については、6～7世紀の于闐（ホータン）で成立し、兜跋（トバツ）の呼称も当地を指す古代トルコ語に由来するとする説が有力である。于闐国の国王は毘沙門天の額から生まれ地乳によって育ったと伝えられ、兜跋毘沙門天の図像には帝王と地乳のイメージの投影が認められる。

安史の乱（755～763）の際に于闐国王尉遲勝が国人5千人を率いて入援したことが中国へ信仰を広めるひとつの機縁となった。当時于闐国は安西都護府に従い辺境守護の任に当たっていたことから、彼らの活躍は、安西城（亀茲＝クチャ）が敵国に責められた際に毘沙門天が城門楼上に現れて救ったという霊験説話の成立にも影響を与えたと考えられる。長安城の表玄関というべき春明門の近くには天下最大の毘沙門天像をまつる天王閣があったと伝えられ、我が国でも現在東寺に伝わる兜跋毘沙門天像は羅城門安置の伝承を持つ。

兜跋毘沙門天像は正式な経典に説かれる尊像でないため、地天が支えること以外は一般形との図像・信仰の違いは曖昧であり、時には都城を守護するエキゾチックな国の守護天に、また時には男女一対のサイの神にも通じる在地の守護神など、様々なかたちで受け入れられ信仰された。

### (2) 北上山地における毘沙門天信仰の特異性

我が国において東北地方は毘沙門天の信仰を考えるうえで特別な地域といえる。成島毘沙門堂、藤里毘沙門堂、立花毘沙門堂など重要文化財に指定される平安時代の古像が岩手県の北上山地、特に北上川の東岸を中心に集中的に伝わり、なかでも成島毘沙門堂像は像高4メートルほどのわが国最大級の兜跋毘沙門天像として威容を誇る。かつての蝦夷と政府との戦線に近く、安西城説話に象徴される毘沙門天の辺境守護の性格から、これらは一説に蝦夷鎮圧のための造像と考えられてきた。

しかし10世紀前半を降らないといわれてきた成島毘沙門堂像は、たとえば獣皮が背中を覆う服制が示すように、989（永祚元）年頃の兵庫県円教寺四天王像など10世末の作例との類似が顕著で、10世紀前半に遡らせることは難しい。10世紀後半以降ならば既に蝦夷の反乱は終息し東国軍事貴族を中心とした新たな秩序が形成される時期である。

無論、蝦夷との関係は無視できず、857（天安元）年に定額寺となった陸奥国極楽寺に比定される国見山極楽寺（廃寺）は胆沢城の真北に位置し2丈8尺（7.8m）の毘沙門天を祀っていたとの伝承があり、このような先行像の存在を想定し、成島毘沙門堂像をその継承作とみなすことも一考に値しよう。

現存作例に限定するならば、造像目的はやはり蝦夷というよりは「異界」に対する守りと捉える方が穏当である。兜跋毘沙門天は羅城門安置の伝承からも明らかなように境界的な場所に多くまつられるが、その目的は外敵の侵攻のみならず疫病など様々な災いの侵入を防ぐことであった。

征夷大將軍坂上田村麻呂は後に「毘沙門の化身、来りてわが国を護る」（『公卿補任』）と神格化され、『陸奥話記』にも「北天の化現にして、希代の名将なり」と称えられる。平泉の達谷窟は田村麻呂が悪路王ら蝦夷を征伐し、108体の毘沙門天像を安置したと伝えるが、東北の毘沙門天の霊場の多くは、田村麻呂伝説と結びつき、後に作り上げられたところが多い。

在地の信仰だけではなく、そこには慈覚大師伝承と同様に、教圏の拡大・強化を図る天台教団との関わりも想定されよう。成島毘沙門堂像は前唐院様と呼ばれる慈覚大師ゆかりの図像にあらわされている。

兜跋毘沙門天像の作例は西日本にも多く伝わり、数的な分布からは東北地方のみを特別視することは客観性を欠くが、信仰の歴史的背景を踏まえるならば、北上山地を中心とした地域はやはり毘沙門天の聖地と呼ぶにふさわしい特別な地域として理解されるのである。[なお、本章の内容の

詳細は、神田（1997、1999）を参照されたい。]

（神田雅章）

## 2. 宮沢賢治の詩に描かれた毘沙門天

### （1）詩「毘沙門天の宝庫」

賢治の北上山地を詠った多くの詩のなかで、筆者らにとって特に興味深いものは、彼の没後に未発表の詩として残され、仮に「春と修羅 詩稿補遺」（「春と修羅 第四集」と呼ばれることもある）と名付けられた一群の詩<sup>1)</sup>のなかの次の一篇である。

#### 毘沙門天の宝庫 宮沢賢治

さつき泉で行きあつた／黄の節絲の手甲をかけた薬屋も／どこへ下りたかもう見えず  
あたりは暗い青草と／麓の方はたゞ黒緑の松山ばかり  
東は畳む幾重の山に／日がうつすりと射してゐて／谷には影も流れてゐる  
あの藍いろの窪みの底で／形ばかりの分教場を／菊井がやつてゐるわけだ  
そのまの上には／巨きな白い雲の峯  
ずゐぶん幅も広くて／南は人首あたりから／北は田瀬や岩根橋にもまたがってさう  
あれが毘沙門天王の／珠玉やほこや幢幡を納めた／（著者ら注：幢幡は「のぼり」と読む）  
巨きな一つの宝庫だと／トランスヒマラヤ高原の／住民たちが考へる  
もしあの雲が／<sup>ひでり</sup>旱のときに／人の祈りでたちまち崩れ  
いちめんの烈しい雨にもならば／まつたく天の宝庫でもあり  
この丘群に祀られる／巨きな像の数にもかなひ天人互に相見るといふ／古いことばもまたもう一度／人にはたらし出すだらう  
ところが積雲のそのものが／全部の雨に降るのでなくて  
その崩れるといふことが／そらぜんたいに／液相のます兆候なのだ  
大正十三年や十四年の／はげしい旱魃のまつ最

中も  
 いろいろの色や形で／雲はいくども盛りあがり  
 また何べんも崩れては／暗く野はらにひろがった  
 けれどもそこら下層の空気は／ひどく熱くて乾いてゐたので  
 透明な毘沙門天の珠玉は／みんな空気に溶けてしまった  
 鳥いっぴき啼かず／しんしんとして青い山／左の胸もしんしん痛い  
 もうそろそろとあるいて行かう

詩のなかにトランスヒマラヤ高原という賢治の造った架空地名が登場する。この名はスヴェンヘディンの命名したトランスヒマラヤ山脈<sup>2)</sup>からの連想で造語されている。インド側からみて、ヒマラヤを越えた位置にある高原はチベット高原である。賢治の時代、北上山地は北上高原と呼ばれていたが、それをチベット高原に見立てて、さらにそれをトランスヒマラヤ高原と賢治流に言い換えたのである。

賢治は、当時の探検家たちがチベットを聖なる地、秘密国などとして見ていたことを踏まえて造語したのであり、冷涼な僻遠の未開の辺地<sup>3)</sup>として見ていたわけではない。

この詩の毘沙門天はしばしば成島の毘沙門天であると解されているが、「この丘群に祀られる／巨きな像の数にもかなひ」ということから散在する複数の毘沙門天像を指していることは明らかである。

賢治は成島の毘沙門天と特定して語る場合には、それを想起させる地名を関している。たとえば童話「なめとこ山の熊」にはこうある。

淵沢小十郎はすがめの赭黒いごりごりしたおやじで胴は小さな白ぐらゐはあったし掌は北島の毘沙門さんの病気をなほすための手形ぐらゐ大きく厚かった。小十郎は夏なら菩提樹<sup>マダガ</sup>の皮でこさえたけらを着てはむばきをはき生蕃の使ふやうな山刀とボルトガル伝来といふやうな大きな

重い鉄砲をもってたくましい黄いろな犬つれてなめとこ山からしどけ沢から三つ又からサッカイの山からマミ穴森から白沢からまるで縦横にあるいた。

北島とは北成島からの造語で、1899（明治22）年まで、北成島村という名があった。同じく、南成島もあり、現在も花巻市内の地区名として、北成島、南成島が用いられている。

成島の毘沙門天はよく知られているが、このほかに立花毘沙門天や藤里毘沙門天などの堂宇があり、それらは南北に並んでいる。詩のなかの、南は人首から北は岩瀬橋にまたがって、というのは、ちょうど藤里毘沙門天堂から成島毘沙門天堂までの堂宇の配列のすぐ東方に当たり、賢治はその南北の堂宇列の西方から東を見ている。そして、毘沙門天の宝庫と言われている雲が、旱魃に際して降雨をもたらさなかったことを、賢治は少し皮肉に、詠嘆調に詠う。

すなわち賢治自身は北上平野の住民として、東方の北上山地を遠望し、そこの住民、すなわちトランスヒマラヤ高原の住民に思いを馳せているのである。

## (2)「装景手記ノート」中の詩

宮沢賢治は多くの詩を草稿のまま遺したが、それらの中で、一冊のノートに収められたかたちのもんとしては「東京ノート」「三原三部ノート」および「装景手記ノート」がある。その「装景手記ノート」の中心的な詩が「装景手記」で、改稿を重ねているが、その過程の一つが次の詩である。

あれが巨大な阿武隈の片麻岩系の 宮沢賢治  
 あれが巨大な阿武隈の／片麻岩系の山塊であるが／そのいちばんの南のはじから  
 巨きなひかる雲の塊ものぼる／それはたくさんの環珞や幡を容れた  
 毘沙門天の宝蔵であると／トランス ヒマラヤ高原の／住民たちが考へる  
 あるときそれが六頭首ある戦馬にvari／千の手



がみなほこや独こや幢幡をもち  
あるひはしづかな印をむすんで／髪をみだして  
怒りたけった天将を載せ  
青ぞら高くのぼって行くと／Seven Hedin も空  
想して／その名与ある著述のなかに  
いろどりをしとかゝげてゐる／この国土の装景  
家たちは／この野の福祉のために  
まさしく身をばかけねばならぬ（以下略）  
（なお、瓔珞は「ようらく」、幡、幢幡は「のぼり」）

賢治の時代には、北上山地と阿武隈山地とは、同系の岩石であると看做されていた。現在では詩の対象の山地は南部北上山地と呼ばれ、古大陸起源の山塊であるとされている。また、Seven Hedin は、正しくは Sven Hedin で、名与は名誉の誤りである。

この詩の上記引用部分の前半は、トランスヒマラヤ高原の住民が上空の雲を「毘沙門天の宝庫」と考えるという、さきの詩と同様のことを詠うが、後半はスヴェンヘディンの著書『トランスヒマラヤ』中に挿絵として描いた天将を詠い、チベット高原そのもののイメージを重ね、さらに「この国土の装景家」たちは、「この野の福祉のために」挺身せねばならぬ、という。

「この国土」とは普通の意味の日本国土ではなく、仏国土である北上の高原を指し、この高原の住民の福祉のために働かねばならない、と説く。賢治自身がこの高原の地質や土質の調査を行ったり、開発のための測量の手伝いをしたりしており、北上山地を聖なる仏国土としようと考えたことと関わる。

ノートでの最終形態は「装景手記」と題する詩になるが、上掲の詩と同じく「この国土の装景家たちは／この野の福祉のために／まさしく身をばかけねばならぬ」という部分がある。

この詩には地殻が隆起して高原を造ることを詩的にこう書いている。

「けだし地殻が或る適当度の弾性もち／したがって地面が踏みに従って／寒天あるひはゼラチンの／歪みをつくるといふことは／ヒンズーガン

ガラ乃至西域諸国に於ける／永い間の夢想であって／また近代の勝れた園林設計学の／ごく杳遠なめあてである」

「ヒンズーガンガラ乃至西域」という範囲の主体にはチベットからパミールにかけての高原地帯が広がるのである。また「風景をみな／諸仏と衆生の徳の配列であると見る」という表現もあり、賢治は仏国土としてチベット高原と北上山地を重ね合わせているのである。

巨視的にいえばチベット高原も北上山地も隆起して高原となったという共通点に彼は着目したのである。

さらに、どちらの高原も平野部の人々から見れば異なる文化を持つ異界としてとらえたのである。前掲の詩の中に「トランス ヒマラヤ高原の住民たち」と賢治が特に記しているのは、平野部に住む賢治がこの場合もトランスヒマラヤ高原の住民を異界の人として認識しているからである。

### (3) 詩「密教風の誘惑」

実はこのスヴェンヘディンの挿絵の天将は、「春と修羅 第二集」のなかの「温かく含んだ南の風が」と始まる詩の下書き稿「密教風の誘惑」にも登場するが、そこでは天将ではなく魔神なのである。このヘディンの挿絵の問題と魔神に関しては鈴木（1994）の緻密な考証があり、夏の夜の星の一部を黒い雲が覆ったことを魔神としたこの詩は「岩手県の夏の星空からヘディンのスケッチ（西藏）への連想の飛躍は、俄には理解しがたい」がその連想を繋ぐものは性欲である、と説明している。

しかし、近年、賢治は花巻の女性と1921年から1924年まで、恋愛関係にあり、かなり熱烈な仲であつたらしい、という見解（澤口、2010など）が公にされている。恋に終止符が打たれたのが1924年5月という佐藤勝治の見解を澤口が紹介しているが、そうであるとすれば、同年の7月のこの詩が、別れた恋人を想い、激しい愛欲の情に懊悩するものとなったのも不思議ではない。

## 密教風の誘惑

宮沢賢治 一九二四、七、五

熟した藍や稗のにほひ／多情な夏の夜風をわたり

稲葉のあおいさやぎを縫って／ほたるはほのかにみだれて飛ぶ

・・・・・・地平線地平線／灰いろはがねの天末で／銀河のはじがほんやりけむる・・・・・・

さはやかな稲<sup>ライス</sup>田の風跡に／蛙の族は声をかぎりにうたひ／つらなりは

こもごもそらに負像を描く／もうにぎやかにはなばなしい／ガンダラ風の夜なのだ

・・・・・・みだれるみだれるアカシヤの髪／赤眼の蠍／そらの泉と浄瓶や皿・・・・・・

螢は消えたりともったり 湿って温い南の風の吹きかへり

くわがたむしがうなっていて行って 蛙はげろげろ啼いてゐる

風が蛙に云わせてゐるか 蛙が風を呼んでゐるのか

北の十字のまわりから 魔蠍大魚の座のあたり／天はまるでいちめん

青じろい疱瘡にでもかかったやう／天の川はまたほんやりと爆発する

(風の云ってゐることは／蛙の云ってゐることとおんなじだ)

天の川のその燃焼の補填として／南のそらは大きな黒いいたでを負った

西藏魔人の風呂敷が／そらの星に吸ひついてゐる

けれども悪魔は天とおんなじことで

力はあっても畢竟流転のものだからやっぱりあんなに／どどん風に溶される

星はもうそのやさしい面影<sup>アントリックス</sup>を恢復し／そらはふた、び古代意慾の曼陀羅になる

・・・・・・螢は青くすきとほり／稲はざわざわ葉擦れする・・・・・・

うしろではまた天の川の小さな爆発

白鳥座からライラ琴へかけて立派な蛇の紋がで

溶けた魔人ははるかな北に生起して 六頭首ある馬に乗り髪をみだして馳けまはる

夜風のそこで蛙は軋り／セブンヘデンは遠くでわらふ・・・・・・

やなぎにみだれる螢の群の／二疋が互にもつれて騰り／天の川の南のはじは

こんどは白い湯気を噴く／古びて青い懸吊体！／天の川の南ブラウン動の燐光点！

ああ あたたかなガンダラ風の風が／南から塊になったり紐になったりして

どしゃどしゃ木立や草を吹き／またわたくしの耳もとで

銅鑼がトロムボンになって碎け／螢は水や空気のなかで／蘇末那の華をともしたり

奇怪な印をほどいたり／また南では

南天では雨のやうに星がながれるのでまっ赤な星もながれるので

もうわたくしは手も青じろく発光し／腕巻時計の針も狂って

帽子を投げろ帽子も燃える／この夏の夜の密教風の誘惑に

あやふく堕ちて行かうとする／菩薩威霊を仮したまへ

そうら／こんどは射手から光照弾が投下され／風にあらびるやなぎのなかを

淫蕩に青くまた冴え冴えと／螢のむれはとびめぐる

カシオピーアの青じろいしかめつら・・・・・・

(なお、詩の中で明らかに誤字と思われるものは“蛙”、“紐”、“恢”などに直した。蠍は「さそり」、魔蠍大魚は「まかつたいぎょ」と読む。)

鈴木の性欲という指摘は、詩の中に「多情」、「誘惑」、「淫蕩」などの語があり、妥当である。さらに、筆者らが付け加えたいことがある。

それは、チベット高原もトランスヒマラヤ高原（北上山地）も聖と性との二つの性格を持つ異界として賢治が意識していたということである。

チベット高原は賢治の時代にはグライラマの統治する仏教国であり、鎖国に近い状況で、河口慧

海や多田等親らの求法僧が苦心の末に入国した。

彼らからの情報によれば、チベットはいわゆる大乘仏教の原典を有する聖なる地域であるとともに、ヤブユム像（歓喜仏、上樂王仏などとも呼ばれる男女合体像）を拝するほか、当時、かなり淫靡な風俗があると、報じられていた。賢治も河口慧海が僧侶でありながらチベットで人妻から言い寄られて困ったというような体験談などを読んで、このような印象をもっていたと思われる。

賢治の童話「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」でも、ネパールからチベットに入る峠がばけもの世界の野原とも繋がっているが、そのチベット側がばけもの世界に対してチベット仏教を化物から守る結界をなすものが「西藏の魔除けの幡」で「風にパタパタパタパタ鳴っていました。」とある。

これはタルチョーという幡で、経文が書かれた沢山の旗竿に結び付けられている。それらが風に鳴るのはお経が読まれていることを示し、タルチョーが祈祷していると人々は信じているのである。毘沙門天が幡を持ち、毘沙門天堂に詣でる女たちが幡を掲げる、と賢治が詠うとき、この幡を連想しているに違いない。

北上山地については、領主が日蓮宗の僧でもあるという点から、賢治にとって聖なる空間であった。甲斐国の波木井（身延）の領主であった南部常長が、日蓮に帰依し、身延に招いて宗門を護持したが、一族のうち、遠野南部氏が日蓮宗の護法を貫き、城主の末裔は現在も日蓮宗の僧侶である。

一方、北上山地はエミシの地として異界であるとともに、詩「原体剣舞連」や短編「十六日」「泉ある家」に見られるような性的なエネルギーを感じさせる風土と、賢治は感じていたのである。

1章において、兜跋毘沙門天像が時には男女一対のサイの神にも通じる在地の守護神にもなる、と述べたが、男性の毘沙門天を地天女が支える姿は、天地の交歓を意味していると北上山地の人々に信じられていた可能性が高く、女性の参詣者が多いこともこれと関係がありそうである。

#### (4) 文語詩「祭日」(二)

賢治の毘沙門天を詠った詩は他にもあり、特に「祭日」(二)と題する詩が重要である。

賢治はその早すぎた晩年、多くの文語詩を創ったが、そのなかに「祭日」と題する詩が二つあり、(一)(二)と番号が付されているが、ここではその(二)を取り上げる。(なお、瘡は「おこり」と読む。)

##### 祭日(二) 宮沢賢治

アナロナビクナビ 睡たく桐咲きて／峽に瘡の  
やまひつたはる  
ナビクナビアリナリ 赤き幡もちて／草の峠を  
越ゆる母たち  
ナリトナリアナロ 御堂のうすあかり／毘沙門  
像に味噌たてまつる  
アナロナビクナビ 踏まる、天の邪鬼／四方に  
つゝ、どり鳴きどよむなり

この「祭日(二)」には「赤き幟もちて」「御堂のうすあかり」「毘沙門像に味噌たてまつる」「踏まる、天の邪鬼」などの語があり、毘沙門堂の祭りであることがわかる。

この詩については、八田(2002)の詳細な考証があり、各聯のはじめの呪文が「法華經」陀羅尼品第二十六のなかの毘沙門天が唱えた呪文を用いて、尻取り式につないだものであることや、赤き幡が、毘沙門天信仰の証しとして堂宇に納める小さな幡であること、などを明らかにしている。

その八田も従来の研究と同じく、この詩は花巻市東和町北成島の毘沙門天を詠んだと解している。

しかしながら、成島の毘沙門天は天邪鬼を踏んではおらず、地天女に支えられているので、賢治の記憶違いとも言われることがある。しかしながら、北成島以外の北上の立花毘沙門堂はいわゆる天邪鬼（実は尼藍婆、毘藍婆）を踏み、江刺の藤里毘沙門堂の二体のうち一体は地天女に支えられ、一体は天邪鬼に似た<sup>にらんば</sup>尼藍婆、<sup>ひらんば</sup>毘藍婆に乗る、のでこれら複数の堂宇の毘沙門像から合成した可能性が高い。

毘沙門天を取り上げた詩には無題で最初の句で仮に呼ばれている次の文語詩もある。

#### 毘沙門の堂は古びて 宮沢賢治

毘沙門の堂は古びて、 梨白く花咲きちれば、  
胸疾みてつかさをやめし、 堂守の眼やさしき。

中空にうかべる雲の、 蓋やまた<sup>まり</sup>腕のさまなる、  
川水はすべりてくらく、 草火のみほのに燃え  
たれ。

次の詩はこの詩の初期形である。

マドンナ像のさまなして／母みどり児をうちい  
だけば  
そらしろくして桜は遷り／川は十里をすべりて  
暗し

をちこちの小祠祀れる／幾丈の毘沙門像の／み  
な国の宝となへ  
はや千の春を経ぬれば／うら青き草火のはて  
に／梨白く花咲きちりぬ

中ぞらにうかべる雲の蓋やまた腕のさまして／  
みどりごを占ふといふ

このように、「をちこちの小祠」、すなわち点在する毘沙門天像を詠じたものであり、特定の毘沙門天堂を指したものではなかったのである。

毘沙門天が天邪鬼を踏むというのは、賢治に限らない一般的な誤解で、踏んでいるように見えるのは、実は<sup>うらんば</sup>尼藍婆、<sup>ひらんば</sup>毘藍婆で、この羅刹の女性たちが毘沙門天を支えているのである。羅刹は鬼神ではあるが仏法護持の役割を果たし、毘沙門天の<sup>けんぞく</sup>眷属である。この地の場合、羅刹女であるのは地天女と同じく地母神的な地祇を象徴するものと考えられる。

詩の冒頭に「瘡」の語がある。ここではオコリと読むが、時にワラワヤミ、すなわち童病みと読むことがある。この瘡の多くは、三日熱マラリア

と呼ぶ病気をと考えられている。間欠的な発熱をもたらし、特に幼児が罹り、重篤な状況になることが多く、重い障害が残ったり、死に至ることもある。

マラリア原虫はもともと日本に存在し、北海道や本州でも夏季にハマダラカによって媒介され流行した。賢治の時代には北日本で大流行することが多く、毘沙門天にその悪疫から子どもを守って貰うよう、母親たちは祈るのである。

1章で指摘したように、兜跋毘沙門天は境界的な場所に外敵の侵攻のみならず疫病など様々な災いの侵入を防ぐ目的で祀られたのであった。この詩の場合も、もともになった口語詩「夏」の下書稿に「峡流の夏」があり、「この峡流の母たちは」とあるので、瘡が北上山地の谷沿いに伝染してくるのを毘沙門天が食い止めるものと解することができる。もちろん当初は北上平野側を守るために建立された毘沙門堂ではあるが、時を経て北上山地を守るもの、と変わっていったのである。

従来、これらの詩は、小沢（1987）が「他者を歌いながら、やはり自分をうたっている」と指摘し、八田（2002）もその意見を支持し、「北上の山峡の人々の願いと賢治の願いは重なるところがあつた。」と記している。もちろん、賢治には山峡の人々に共感を持っていたことは確かであろう。しかしながら、この詩は、明らかに山峡の人々と平野に住む賢治とのアイデンティティの違いに基づいて詠まれているのであり、その視点がこの詩の理解には欠かせないものと思われる。

（米地文夫・一ノ倉俊一）

### 3. 宮沢賢治の詩に描かれた谷権現（丹内神社）

#### (1) 賢治の詩「祭日（一）」

「祭日（一）」は『女性岩手』誌上に1932年11月「祭日」の題で掲載され、文語詩一百篇に定稿が収められている。その詩は「谷権現の祭り」とて、麓に白き幟たち・・・と始まる。これは、花巻市東和町の丹内山神社、別名谷権現を詠ったものとみられる。



### 祭日（一） 宮沢賢治

谷権現の祭りとして、麓に白き幟たち、  
むらがり続く丘丘に、鼓の音の数のしどろなる。

穎花青白き稲むしろ、水路のへりにたゞずみて、  
朝の曇りのこんにやくを、さくさくと切にけり。

この詩の谷権現とは、花巻市東和町谷内の丹内山神社を指す。谷内も丹内もタンナイに当てた漢字で、アイヌ語が語源である。明治の神仏分離以降、神社と称しているが、本殿裏の胎内石と呼ばれる差渡し10m余りの巨石を信仰の対象とするもので、おそらくはエミシの古い信仰を伝えるものであろう。

『女性岩手』の発表形も上記とほぼ同じであるが、こんにやくを切るということの意味がわからない。しかし、下書きの第一形態では、次のようになっている。

谷権現の祭日目を／そら青々と晴れたれば／  
煮物をなして販りなんと  
青き稲田をせなに負ひ／水路のへりにかゝまりて／ひとひら鈍き灰いろの  
こんにやくをさくさくと切りにけり

モッペをうがち児を負ひて／青きパラソルかざしつ、／祭りに急ぐ農婦あり  
はじめに店のをうちのぞき／歪める梨と菓子とを見／次には切らるゝこんにやくを  
やゝながしにうちまもり／その故なにかわかねども／うらむがごときまなこして去る

つまり、前半は祭りで売る煮物に入れるこんにやくを切る女性、後半はその店をのぞく女性とが描かれている。『女性岩手』にふさわしく女性を詠った詩にする考えだったのである。

（米地文夫・一ノ倉俊一）

## 4. 毘沙門天と丹内神社との位置関係

### （1）奥六郡と閉伊

兜跋毘沙門天は、従来、北方鎮護のためのものと単純に解されてきた。しかし、中国でこの像が造られた時期は、唐にとってはむしろ西方ないしは西南方を守ることが重要であった。

岩手県の兜跋毘沙門天についても、8世紀から9世紀にかけて大和朝廷の勢力が北上川中流域を北へ侵攻してゆくに伴い、次々に北に築かれていった、と漠然と解されがちであった。

しかしながら1章において述べたように、毘沙門天像の様式から10世紀後半以降のものとすれば、当時すでに、北上平野の中部から北部にかけては奥六郡と呼ばれ、朝廷の支配地域というよりは安倍、清原、藤原などの豪族の領地となっていたことを踏まえて毘沙門天像が祀られた、と考えるべきである。

1章において、この豪族を東国軍事貴族と記したが、時代を経るにしたがって、この東国軍事貴族に準ずる性格を持った在地の豪族が奥六郡を支配するようになる。これらを入間田（2005）の用例に従えば、軍事首長という名がふさわしい。

奥六郡を支配する軍事首長にとっては、北方地域の糠部（ぬかのぶ）に対峙するラインよりは、東方の、これも未だ朝廷ないしは軍事首長に服属していなかった閉伊（へい）、すなわち北上山地東部のエミシの地域に接する境界の方がより長く、より重視されていたのではないだろうか。

### （2）兜跋毘沙門天の配列

兜跋毘沙門天を祀る堂宇は、北上川の左岸、すなわち東側に三ヶ所、直線距離約25kmの間に配列している。北に成島毘沙門堂（花巻市東和町北成島）、真ん中が立花毘沙門堂（北上市黒沢尻立花）、南が藤里毘沙門堂（奥州市江刺区藤里）で、北上山地西縁の低山地帯内に位置する成島と藤里の毘沙門堂に対して、立花毘沙門堂は北上山地の西麓にあるので、三者は「く」の字に並ぶ。この配列は前述の北方、東方の両方向のうち、東方の閉伊に対峙する形になる。

立花毘沙門堂は、國見山一帯に広がっていた極楽寺寺院群の一堂宇だと言われている。そうであるとすれば、極楽寺は低山地域に広がるので、これを繋げれば、くの字よりも一直線に近くなる。

また、もう一つ、えさし郷土文化館に隣接する小名丸毘沙門堂がある。

もしも一般に信じられているように、大和朝廷側の北方鎮護のため最前線に設けられたとすれば、10 km 弱の北進のたびに、順次毘沙門堂を建ててゆくことになり、不自然である。また、これらの毘沙門天堂がほぼ同時期に建てられたとすれば、北方に備えて東西方向に並んでいないのが、やはり不自然である。

したがって、これらの毘沙門堂は、ほぼ同時期に、東方に対峙して、南北に並ぶ配列をなしているということになる。

### (3) 丹内神社の配列

ではこの奥六郡側の毘沙門堂の配置に対峙する閉伊側には、どのような地域構造がみられるであろうか。一つの仮説として丹内社（賢治の詩でいう谷権現）を結ぶ丹内ルートとでも呼ぶべきものがあった、と考えた。

北上山地には次のような丹内を冠する神社がある。

- A 丹内薬師堂 青森県八戸市大字妙字丹内
- B 丹内神社 岩手県久慈市小久慈町
- C 丹内神社 岩手県久慈市宇部町
- D 丹内神社 岩手県釜石市栗林町
- E 丹内神社 岩手県遠野市綾織町上綾織
- F 丹内山神社 岩手県花巻市東和町谷内

このリストから、A から D までは三陸海岸を南下し、D で西に向かい北上山地を横断する手前で F に至って終わるルートがあったと推定したい。これはいわばエミシ道であり、平和な関係では交易路、騒乱時には進軍路となるであろう。

おそらくは宮古付近にも丹内神社があったと思われるが、失われたか姿を変えたのであろう。後者とすれば、宮古市長沢の髪長神社あたりであろ

うか。この神社は中世、閉伊氏宗家田鎖氏創設と言われているが、丹内神社がその前身であったのではないだろうか。

この道の主部はむしろ三陸沿岸の海路であった。この海路は菅野（1995）がいうように「『閉伊七村山徒』を含む奥地の俘囚たちをむすぶ海の世界として存在していた」のであろう。

「閉伊七村山徒」とは、延久二年北奥合戦（延久蝦夷合戦ともいう）といわれる戦役で、前九年の役と後三年の役との中間の1070（延久2）年に行われた征夷の対象となったエミシたちである。陸奥守源頼俊が清原氏らを主体とする征討軍を率いて、奥六郡の周辺のエミシを平定しようとした大規模な戦争であったが、その詳細には不明な点が多い。

入間田（1997）は、その進攻路を「北上山地を横断する最短距離（難路）を選ぶことがかなわず、糠部に北上して、それから海岸伝いに南下するという久慈経由の迂回路を進むことを余儀なくされた。」と述べている。

この征討はいわゆる夷をもって夷を征するもので、朝廷側の俘囚を主体とした軍であったので、エミシ道を用いたのであろう。

なお奥六郡の北方は前述のように糠部（ぬかのぶ）と呼ばれたエミシ圏で、後に王朝国家の支配下に組み込まれ、同名の郡となる。この地域に丹内を冠する神社は現存しないが、地名としては青森県三戸町斗内に丹内、同じく青森県三戸郡田子町に下モ丹内、などが残っている。

丹内神社以外にも、閉伊側すなわちエミシ側であった地域には、大和朝廷側の祭神とは異なる神々、すなわちエミシ側の祭神が祀られている例は多い。代表的なものには、早池峰の祭神である瀬織津姫命があり、これについては一ノ倉・米地（1992）や一ノ倉（未発表）において触れている。また、祭神不詳の小祠は、久慈の小袖など各地にあって、その多くはこの種のものとみられる。

#### (4) 丹内の語源

丹内（タンナイ）のナイがアイヌ語の nai, または nay で 川 の意であることはほぼ確実であろう。問題はタンで、従来は長い川 tanne-nai タンネナイの意であろうと言われてきた（菅原、2012）。

しかし、筆者等はこれを古アイヌ語のこちらの川 tan-nai タンナイ、もしくはこちら側の川 tan-nu-nai タンヌナイと考える。こちら tan に対しては、あちらは ar アル、または an アンと言う。つまり、エミシにとってはタンナイはこちら側、すなわちエミシ側の川なのである。

そして彼らのアニミズムの世界の中で、最も重要な聖なる存在は、食料を与えてくれる川である。その彼らの川の領域、彼らにとっての「こちら側」をマーキングするものが、丹内神社であると考えられる。そして「あちら側」の毘沙門天列で結界された奥六郡と向かい合うのである

（米地文夫・一ノ倉俊一）

#### 5. トランスヒマラヤ高原への賢治のまなざし

「毘沙門天の宝庫」など毘沙門天を取り上げた宮沢賢治の作品からは、北上川沿いの平野部の住民の一人である賢治が、東方の南部北上山地を、一種の異界として捉え、その異界、エミシ圏との境界が毘沙門天堂の列であることを認識していたことが読み取れる。

そして、このエミシ圏を賢治はさらに、チベット高原等と同じく、「聖なる仏国土」であるとともに、「淫靡で蠱惑的な情感を持つ地域」でもある、というまなざしで観ているのである。

祭日（一）と（二）について筆者らが特に注目しているのは、宮沢賢治は意図的に、この二つの詩に同じ題を付したのではないと思われることである。わざわざ同じタイトルにしたのは、エミシの領域の前面の丹内山神社（谷権現）と平安王朝国家の支配域の前線の毘沙門天堂列とを対置させたかったのではないだろうか。前者が白い幟、後者が赤い幟と対照的なのである。

ただし、対置は対立ではない。毘沙門天堂列は古代の平野部、奥六郡の豪族たちの意図としては

閉伊のエミシたちとの対立と交流との境界であったと思うが、今はむしろ、北上山地に住む人々の信仰の対象であり、賢治はこれをトランスヒマラヤ高原に住む人々の祀るもの、と観ているのである。すなわち、イーハトヴ全体の人々ではなく、かつてのエミシの地であった高原の住民を、賢治は異界の外である平野部の住民のまなざしで観ているのである。

すなわち、南北に並ぶ毘沙門天堂の列を挟んで二つの地域にわかれる。

西側	東側
北上平野	北上山地
イーハトヴの野原	トランスヒマラヤ高原
奥六郡	閉伊
古代の朝廷側勢力圏	古代のエミシ勢力圏

境界の毘沙門天堂は、一般には西側、すなわち朝廷側が対峙する異郷への備えないしは守りとして建立されており、その堂宇を結ぶ線はいわば西側の防衛線を示している。

しかし、賢治の詩では毘沙門天堂は東側のトランスヒマラヤ高原の人たちの信仰の対象であり、彼らが毘沙門天の宝庫と考える雲も、毘沙門天堂の東側の上空に浮かぶのである。それを北上平野側に立つ賢治が遠望して詠っている、ということになる。

（一ノ倉俊一・米地文夫）

#### おわりに

南部北上山地は多くの特異性をもつが、本稿では、古代、西方の北上平野が奥六郡となっても、エミシ圏であり続けていたことが、近代に至るまで特異な地域性を持つことになったことに着目した。賢治が詠った毘沙門天堂や谷権現（丹内社）については、次のようにいえることがわかった。

- ①南部北上山地西縁の毘沙門天堂は北方に対峙して設置されたものではなく、東方のエミシ圏に対峙するもので、一種の結界であった。

- ②三陸海岸に沿い南下し、さらに南部北上山地を横切って配列する丹内社（谷権現）は、エミシ圏の地祇であると考えられる。
- ③長い年月を経て、東方のエミシ圏に対する結界であった毘沙門天堂列は、逆に南部北上山地の住民側が自分達の地祇であるという意識を持つに至った。
- ④南部北上山地の西方、北上川に沿う平野部の住民である宮沢賢治も、彼の住む平野部と南部北上山地とは異質であるという時空間感覚を持っていたことが、彼の作品から読み取れる。

その上、南部北上山地を賢治は次の二点をも持つと認識していたのである。

- ⑤南部北上山地はチベット高原等と同じく聖なる仏国土である。
- ⑥南部北上山地はチベット高原等と同じく性的な情感を持つ蠱惑的な地域である。

トランスヒマラヤ高原に向けた賢治のまなざしは、時に仏国土を創らんと菩薩道を歩む者の祈りを込めたものとなり、時には煩惱に身を焼く修羅のギラギラした視線となって異界をとらえていたのである。

（米地文夫・一ノ倉俊一・神田雅章）

## 謝辞

本稿を草するにあたり、多くの方々からご協力を賜ったが、とりわけ熊谷誠氏と玉山香織氏にさまざまなご助力をいただいた。記して謝意を表する。

## 【注】

- 賢治は彼の口語詩を詩とは敢えて呼ばず、「心象スケッチ」と称した。それらのうち、生前に刊行されたのは『心象スケッチ 春と修羅』第一集のみであった。
- ヘディンが1906～08年の南チベット探検で発見した山脈で、ヒマラヤ山脈とチベット高原との間に、もう一列の長大な山脈があることを発見し、トランスヒマ

ラヤ山脈と名付け、画期的な地理的発見として世界の賞賛を集めた。しかし、この山脈の一部は当時すでに知られており、現在では一連の長い山脈とせずに断続する複数の山脈とする方が妥当であるとして、この名はほとんど用いられていない。

- このような見方は、第二次大戦後、大宅壮一が北部北上山地のある村を、岩手のチベットと言われているとルポルタージュしたことが、広く誤解されて、岩手県を貧しい「日本のチベット」と差別的な蔑称と呼ぶようになってからのものである。日本人はチベットを未開の後進地と考えがちであるが、むしろ独自の高い文化を持つ地域である。

## 【文献】

本稿は各章末尾に記したように、1. は神田が、他の4章（2、3、4、5.）は米地・一ノ倉が執筆した。したがって文献もそれぞれ分けて掲げる。

【1. 文献】（東北地方の兜跋毘沙門天像に関するものに限定）猪川和子（1963）地天に支えられた毘沙門天彫像—兜跋毘沙門天像についての一考察、美術研究、229、日本彫刻史論（1975、講談社、所収）

大矢邦宣（1999）図説 みちのく古仏紀行、河出書房  
大矢邦宣ほか（2012）みちのくの仏像、別冊太陽、平凡社  
神田雅章（1997）平安時代兜跋毘沙門天像の研究、鹿島美術研究（年報第14号別冊）

神田雅章（1999）兜跋毘沙門天像の謎、国宝と歴史の旅3 神護寺薬師如来像の世界、朝日新聞社

久野健（1971）東北古代彫刻史の研究、中央公論美術出版  
近藤健（2009）古代の四天王信仰と境界意識、仏教大学宗教文化ミュージアム研究紀要、5、5-23

むしゃこうじみの（1980）東日本の毘沙門天、地方仏、法政大学出版局

## 【2～5. 文献】

浅沼利一郎（1988）宮沢賢治と早池峰山、清水印刷

浅沼利一郎（1991）宮沢賢治と早池峰を翔る、清水印刷

一ノ倉俊一・米地文夫（2009）早池峰山の地形景観と地名・伝承との関係、東北地域環境計画研究所、早池峰の自然環境、9-33

一ノ倉俊一（未発表）早池峰神楽の謎

入間田宣夫（1997）延久二年北奥合戦と諸郡の設置、東北アジア研究、1、89-108

入間田宣夫（2005）北日本中世社会史論、吉川弘文館

大石直正（2010）中世北方の政治と社会、板倉書房

小野義春（1984）おおはさま物語、大迫町教育委員会

小沢俊郎（1987）宮沢賢治論集3 文語詩研究・地理研究、有精堂

金子民雄（1979）山と雲の旅、れんが書房新社

菅野文夫（1995）気仙郡金氏小論、岩手大学教育学部研究年報、54-(3)、29-40

菊池展明（2000）エミシの国の女神 早池峰—遠野郷の



母神＝瀬織津姫の物語、風琳堂  
工藤雅樹（2001）古代蝦夷、吉川弘文館  
國井隆一（1990）文語詩人宮沢賢治、筑摩書房  
澤口たまみ（2010）宮澤賢治 愛のうた、盛岡出版コミュニケーション  
菅原進（2012）エミシのクニのアイヌ語地名解——、熊谷印刷出版部  
菅原隆太郎（1953）早池峯山、岩手日報社  
鈴木健司（1994）宮沢賢治 幻想空間の構造、蒼丘書房  
對馬美香（1987）祭日〔一〕〔二〕・「毘沙門の堂は古びて」考、弘前・宮沢賢治研究会会誌、5  
對馬美香（2002）「毘沙門の堂は古びて」、宮沢賢治 文語詩の森 第三集、柏プラーノ、40-44  
八田二三一（1999）祭日〔二〕、宮沢賢治 文語詩の森 第三集、柏プラーノ、249-256

米地文夫（1991）自然地域名「北上盆地」と「北上平野」——地理教育における自然地理用語と自然地域名の問題（1）——、岩手大学教育学部研究年報、51-（1）、105-118  
米地文夫（1993）「北上山地」の呼称に関するターミノロジー——地理教育における自然地理用語と自然地域名の問題（2）——、岩手大学教育学部研究年報、53-（1）、167-182

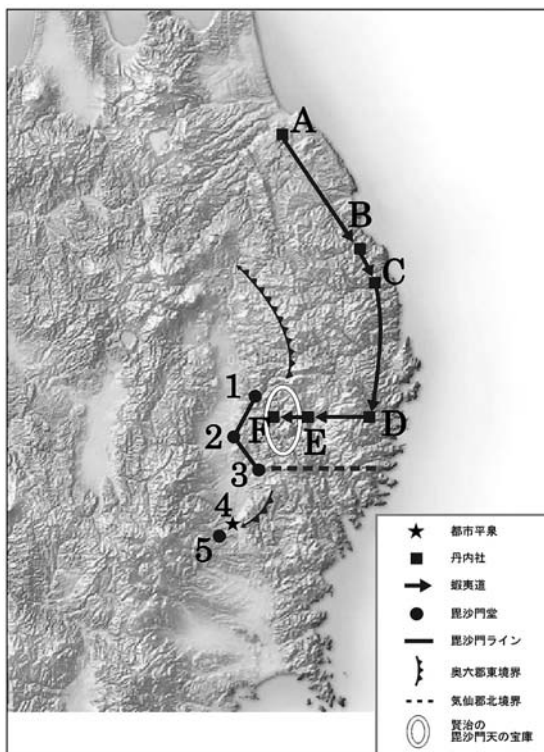
なお、本稿の中の賢治作品引用は原則として新校本全集に拠った。

（2013 年 6 月 28 日原稿提出）

（2013 年 9 月 12 日受理）



図1：成島の兜跣毘沙門天および地天女像  
(『図説 みちのく古仏紀行』1999、河出書房所収)



A～F (本文参照)

1 成島毘沙門堂

2 立花毘沙門堂

3 藤里毘沙門堂

4 平泉

5 達谷窟

図2：奥六郡と閉伊との関わりおよび賢治作品との関係略図 (蝦夷道 = エミシ道)

# **Spatiotemporal Locations of Bishamondo Temple and Tani-gongen in the Southern Kitakami Mountains : What Kenji Miyazawa Saw**

Fumio Yonechi, Shunichi Ichinokura and Masaaki Kanda

**Abstract** Yonechi et al. hypothesized that Kenji Miyazawa had spatiotemporally recognized that the western edge of the southern Kitakami Mountains served as the Kitakami plain's boundary with the heterodox world in the east and tested this hypothesis. Miyazawa likened the southern Kitakami Mountains and the Kitakami plain to the Tibetan Plateau (Trans Himalayan highlands in his works) and the plains in China. The reason behind this is that there was a time when Okurokugun, the western plain controlled by the Yamato dynasty the military chiefs, and Hei, the land of the Emishi people in the east, faced each other, and that history of the area's topographical changes has been passed down through the legends of Aterui and Abe no Sadato, various local performing arts, and festivals. For example, the string of temples and shrines that enshrine sculptures of Tobatsu Bishamonten, located on the western edge of the southern Kitakami Mountains, is the sacred barrier for the east, and west of the string is the heterodox world, which believes in the existence of Tani-gongen (Tannai Shrine). However, this barrier, which was originally built by the west side, later became the east side's barrier against the west. Kenji Miyazawa also felt that the barrier was more like the beginning of the underworld rather than a neutral boundary.

**Key words** Kenji Miyazawa, Bishamondo Temple, Tani-gongen, Trans Himalayan highlands, sacred boundaries